



立花大敬さん「しあわせ通信」
のお話を紹介していきます！

立花大敬さんの言の葉

誠の道

江戸時代に白隠禪師という素晴らしい方が出られたのですが、晩年になって北野天神の神さまが出現されて、神さまから『延命十句観音経』というお経を広めて、多くの人を苦難から救い出してくれと依頼を受けられたのです。

面白いもので、仏教の高僧方も、人生の重要な節目などでは日本古来の神様と出会われて方向が決まったりした場合が多いようですね。

鎌倉時代の明恵上人はとても純粋な方で、お釈迦さまが慕わしくて、その旧跡をたずねたいと、準備をしていざインドへ出発せんとされた時に（唐に行くのさえ成功率が五十%もなかった時代なので）から、ほぼ不可能な大変な決行なのです。春日の神さまが知り合いの女性にのり移って（その女性が光輝いて、あたり一面にすばらしい香りが満ちたそうです）、思い止まるように説得され、インド行きを断念されました。

道元禪師は中国（宋）で病いに倒れた時、伏見稻荷の神さまが出現されて丸薬を下さり、それを飲みこむとたちまち治ったと記録が残っています。

なぜ、伏見稻荷なのか不思議に思っていたのですが、道元禪師が、お母さんの里である京都の伏見の藤原氏の荘園で生まれ、成長されたというのを知って納得できました。伏見稻荷は道元禪師にとっては産土の神さまなのです。

また、日本に帰る間際になって、『碧巖録』という本を発見されて、コピーなんてない時代ですから、写本といって、筆で書き写してゆくのですが、とても出発までに間に合わない困っておられたところ、白山の神さま（菊理姫の神）が出現されて、一夜で書き写して下さったという言い伝えがあります。どの寺でしたか、そのへ一夜碧眼が保管されていて、筆跡が途中で変化しているそうです。

一遍上人は、修行上の悩みがあつて苦しんでおられた時、熊野の神さまが夢の中に現れて教えて下さった。その教えによって一遍上人は念仏の悟りを得られたということです。

北野天神とは菅原道真公のことですね。菅公は熱心な観音信仰をお持ちで、大阪に道明寺という、十一面観音をおまつりするお寺をつくっておられます。そんなわけで、『延命十句観音経』という、観音さまのお経で多くの人を救いたいという御意志をお持ちなわけですね。

北九州で毎月、皆さんと禅の会をしているのですが、皆さんと『延命十句観音経』を唱えることにしているのです。

これはふと思いついてそうしたのですが、実は、この禅の会の会場は菅原神社なのです。

私はいつも禅の会がはじまる前にお参りをし、禅の会に参加される方々が、元氣よく、楽しい、屈託のない人生がおくれますよう、御援助下さいと祈っていたものですから、菅公は、『じゃあ、十句観音経を唱えなさい。これを唱えている人の処に行つて救うのが私の誓願だから』と、私にインスピレーションを与えて下さったのです。

白隠禪師は『延命十句観音経靈驗記』（大蔵出版）という本を著して、このお経を唱えて救われた方々の体験談を数多く集めておられます。この本の一番最初に次のような話のついでに。

京都三条の通町の商人の妻が難治の重病で、どんな治療も効果なく、もはやこれまでかということになりました。

夫はとても悲しんで、毎夜北野天神に丑の刻（午前一時から三時まで）参りをして神さまが救って下さることをお祈りしました。

その七日目のことです。神前で、お願いをして帰りかけた時、境内の茶店に明りが見えたので立ち寄ったところ、何とも神々しい老僧が一人腰をかけておられました。

夫がやって来たのを見て声をかけられます。

「汝は何故に、夜毎神前に詣でているのか。何を求むるのか」

夫は妻の病いのことを語りました。それを聞いて、この老僧はしばらくの間、指を折って数え、占っているような様子でしたが、眉をひそめて嘆いておっしゃいました。

「ああ、なるほどこれは必死の重病だ。たとい日本の医師を連れてきて、その技倆を尽くさせても決して救うことはできぬ。だがここに最後に残った一つの方法がある。これから秘密の経文を汝に授けよう。『延命十句観音経』というお経である。これをしっかりと覚えて帰り、一家中で病人を囲んで唱えたら、必ず夜が明けるまでに全快するであろう」そして、この老僧は十句経を唱えはじめました。この夫もそれについて唱えます。二十、三十遍も唱えたら、とうとうややく暗唱できるようになりました。とても有難くて、うれしくて、この御老僧を心から礼拝して家に帰ってきました。

玄關を入りますと、何だか大きな声があります。家族一同が集まって病人を囲んでお経をあげているのです。そのお経をよく聞きますと、それはまさしく先ほど北野天神の境内で老僧からお教え頂いた秘文でした。

夫はびっくりして、家族に「なぜ、そのお経を唱えているのか」とたずねましたところ、家族は次のようにいいました。

「先ほど、どこからか、とても気高い老僧が出現されて、『この病人は

天下第一の名医であつても治せぬ。我が最上無比の秘密の経文を知っているから、このお経を一家中で病人を囲んで唱えよ。そうすれば必ず夜明けまでに全快できる。そうおつしやつて、一同にそのお経を教えてくださつたのです。一同は喜んで唱え習ひ、二、三十遍も唱えて、ようやく覺えたかと思つたら、いつの間にか、その老僧はいらっしゃらなくなつていたので。その老僧の言葉を信じて、お経を皆であげているところだす」

夫はその老僧のお顔の様子は、衣服の色や形は、などと詳しくたづねて、自分が出会つた老僧とくらべてみますと、同じ方であることが分かつたのです。

一同驚くやら喜ぶやら。これはきつと北野天神が同時に二箇処に出現されて、経文をさずけて下さつたのにちがいない。私たちの信を高めるために、こんな奇跡をあらわして下さつたのだと、一層勇んで一同でお経を唱えつづけました。

そうしますと、病人の顔に血色がもどつてきました。そしてお腹が空いたといひ出して、食事ものを通るようになって、夜明けを待たずに全快したといふことです。

白隠禪師は江戸に出られ、『碧巖録』の講義をされ、あわせて『延命十句観音経』をお広めになられました。

そのお話しを聞いていた岡田氏の長男、歳は二十五で、とても美しい容貌で、人柄もやさしく、親孝行は生まれつきだったので、残念なことに病気がたえず、結婚も出来ず、仕事もできずに世をすごしてしまつた。

そんな時、白隠禪師から、十句経の功德、死人が蘇生したり、生まれついでる盲人の目があいたり、火難盗難をまぬがれたり、そんな実話を聞いて發憤したのです。『このまま虚弱で、人の世話を受けて、人のために何の働きもせずにおわつてしまふのは残念だ。ぜひ健康になつて、親にも周囲の方々にも喜んでもらいたい。よし、白隠禪師の言葉を信じてこれから十句観音経を一萬遍読もう』と志を立てたのです。

そして、一萬遍を満了した夜、夢を見ました。

夢の中で湯島の天満宮にお参りしています。

神前に進みますと、天神様が、円い光の御体で出現されたのです。そのかたわらに神々しい老僧が端座しておられます。

そして、その老僧が高らかにおしゃいました。

「よいかな、よく来た。汝はけなげな志を發して、十句観音経をよく唱えてくれた。神妙なことである。その功德ははかり知れない。神も汝の誠、真心に感じ入つて、汝の病いを今日よりスキと全快させようとおつしやつておられる。そのお礼として、今後もおつしやつて十句経を唱えよ。さらば、神のお力はさらに汝に加わり、今後、大難、盗難、病難もなく、よき妻をめぐり、よき子にめぐまれ、末々繁盛いたすであらう」

そうおつしやつたところまで目が覺めたのです。その時より病気が全快

して、その後すばらしい人生をおくつたといふことです。

菅原道真公には、へ心だに誠の道にかなひなば祈らずとも神や守らん」といふ有名な御歌があります。

実はこのお歌には秘密があります。その秘密を知つて、この歌をとなえますと、どんな願い事でも必ず叶う。その秘密を知らないでとなえたら、普通の功德しかないといふことです。

その秘密をもらした者は必ず罰を蒙るといふ言い伝えなのですが、へ心だに真の道にかなひなば、私はその秘密が埋もれてしまつて誰も知らなくなつて終つてしまふことの方が神様のために残念なことだと思ひますので、あえて皆さんにお知らせします。

ご存知のように菅原道真公は誠心誠意、天皇様のため、国家のためにと政事をされたのですが、当時の実権グループのために陥れられて九州まで流されたのです。そしてその地で失意のうちになくなられました。

それでおなくなりになる時、私のように誠、真心で事に当りながら、周囲の無理解や悪意のためにやりとげられぬ、そんな人をもう一人も出したくない。死後私は神となつて、そんな苦難に出会つてゐる人がいたら、その人のところに分身散体して出向いて、その人のために、あらゆる援助をする神とならう。そういう誓いを立ててこのお歌をつくられたのです。

このお歌のへ誠は、実はへ真と書くのです。そうしますと、このお歌の中にはへ真があり、へ道があり、へ神があり、あわせて、へ道真神となりませう。このお歌で道真公は、誠、真心をもって事に当たる者を、私は神となつてまもり必ずやりとげさせようぞと宣言しておられるのです。

真道と順序が逆になつてゐるのは、逆さまに押し落とされるような目にあつて、私は神になるんだといふ意味をこめておられるのです。

ですから、道真公、北野天神様のお力を頂きたい方は誠、真心で事に当たること、このお歌で道真公をお呼びして、お願い事をして延命十句観音経を、あるいは千遍、万遍と、回数を決めてお唱えされたらいいのです。

『延命十句観音経』

観世音 南無仏 与仏有因 与仏有縁

仏法僧縁 常楽我淨 朝念観世音

暮念観世音 念念従心起 念念不離心

立花大敬(たちばな だいけい)さんの紹介

昭和23年大阪生まれ。
大阪大学にて生物工学を研究。
19歳(大学在学中)、禪に入門。
以来、曹洞、臨濟宗の諸老師に指導を受けてきた。
42歳、伊勢神宮にて天命を知る。
この時期と前後して、数年間に4冊の本を一気に出版する。

45歳で、進学校の高校教師となる。
48歳、再び「筆の御用」を開始し、《しあわせ通信》を毎月発行。
著書に「天界の禪者大いに語る」「悟」「禪」「禪の達人たち」
「しあわせ通信第1集～第10集」などがあります。
今回は「しあわせ通信第5集」に掲載されていた、「誠の道」を紹介させて頂きました(^_^)